# 長崎県·福江島水中文化遺産調査

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11037

## 長崎県・福江島水中文化遺産調査

# 野上建紀・中野雄二 佐々木達夫・佐々木花江

#### はじめに

NPO 法人アジア水中考古学研究所では、今年度より水中文化遺産データベースの作成を始めた。平成 20 年度は日本財団の助成を受けて九州地方を対象としている。海に関わりをもつ各団体へのアンケート調査をはじめ、文献資料収集や現地視察、潜水目視調査等を行い、データベースを作成して広く公表し、水中文化遺産の保護と活用のための一助としたい。

今回、平成20年4月20日・21日の2日間にわたり、 長崎県福江島五島市に所在する水中遺跡の調査を実施 した。以下、その概要を報告する。

#### 福江島所在の水中遺跡(海浜遺跡)

平成20年4月20日午前に五島市へ到着後、五島観 光歴史資料館に赴き、学芸員より五島市の水中遺跡に 係わる種々の情報を入手した。

続いて海底遺跡の野外ミュージアム構想の参考とするため、水中観光用グラスボート「シーガル号」に乗船し、福江港外にある福江海中公園を見学した。「シーガル号」は定員60名(見学定員36名)、喫水線から船の外底まで1.6 mであり、水深2.5 m程度の浅い海域にまでは入ることができる。福江海中公園の透明度は、太陽光が十分に差し込む海面付近では水平方向10~12 m以上であるが、垂直方向は水深10 mぐらいの海底の砂地がうっすらと見える程度である。海底遺跡ミュージアム構想の候補地の一つである小値賀島周辺海底遺跡でグラスボートを使用する場合、水深5 m程度の海底に陶磁器が散乱している山見沖海底遺跡や碇



Figure 1 福江島位置図

石が海底に沈んでいる赤丸瀬などの見学には有効であると思われる。一方、同程度の透明度があったとしても、前方湾海底遺跡の主体部であるクスクリ崎沖では水深が10数mもあるために観察することが難しい。午後からは、福江島内の水中遺跡である江湖貝塚、堂崎遺跡、大浜遺跡を巡った。

翌21日は五島の遺跡等に詳しい永冶克行氏にご案内いただいた。また、郷土史家の田中栄次氏をご紹介いただき、氏からは遺跡に係わる貴重な情報等を伺うことができた。午前中に文献等の資料調査と勘次ヶ城跡沖の調査を行い、午後に離島した。以下、各遺跡や史跡等について述べる。

### ①江湖貝塚 (えごかいづか)

五島市中心部から南東2kmほどに位置する大津町字 江湖に所在する。かつては松の繁る砂丘であったが、 現況は昭和31年(1956)の台風により打ち上げられた という大小の溶岩礫が一帯に広がっている。満潮時に は深さ1mほど海中に没する。

江湖貝塚は、昭和44年(1969)に長崎大学医学部解剖学第2教室が主体となり発掘調査が実施されている。トレンチ発掘により4つの層に分層、上から2層目に縄文前期の貝塚層を確認している。出土遺物は貝をはじめとする動物遺体、骨角器、石器、土器などで、土器については九州縄文前期に位置づけられる曽畑式土器のみの出土であった。以上の遺物は、現在、長崎大学医学部解剖学第2教室が保管している。

今回の調査では、干潮時を見計らい現地に赴いて遺跡周辺を踏査及び写真撮影を行った。遺物等の採集はできなかった。なお、下記文献にある位置図と長崎県遺跡情報システムに記載されている位置図は場所が異



Figure 2 遺跡位置図

なる。

#### (参考文献)

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編 1996 『原始・ 古代の長崎県』資料編 I 長崎県教育委員会

#### ②堂崎遺跡(どうざきいせき)

五島市中心部から北西に約6kmの奥浦町字堂崎に所在。長崎県指定有形文化財の堂崎天主堂の東側広場から南北に伸びる砂丘と、砂丘東側の内海部と西側の外海部の海岸線一帯が遺跡であり、満潮時には海中に没する。

堂崎遺跡は昭和51年(1976)に発見され、その後、 平成2年(1990)に範囲確認調査、平成3年(1991) には本調査が福江市教育委員会により実施されてい る。本調査によって石器、貝製品、自然遺物、人骨、 土器などが出土し、土器は轟B式、曽畑式、阿高式など、 九州縄文前期~中期に相当することがわかった。遺物 は五島市教育委員会が保管している。

今回、遺跡周辺の踏査・写真撮影を行った。干潮時であり、小さな島のある内海部は完全に干上がった状態であった。砂丘部で縄文と思われる土器の小片を確認している。

#### (参考文献)

安楽勉 1991 『福江・堂崎遺跡』(発掘調査概報)福 江市教育委員会

安楽勉 1992 『福江・堂崎遺跡』 福江市教育委員会 ③大浜遺跡 (おおはまいせき)

五島市中心部から南西約 5 kmの富江湾北側大浜町字 浜郷に所在する。遺跡は平地部と海岸部砂浜一帯に広 く分布する。満潮時には砂浜の一部が海中に没する。 なお、明治の中頃までは現在よりも 200 m程先まで砂



Figure 3 グラスボート「シーガル号」外観



Figure 4 グラスボート「シーガル号」内部 浜であったが、砂が流出し続けたために、現在の汀線 にまで海進したとのことである。

大浜遺跡は大正期から知られており、以降、昭和10年(1935)、昭和37・38年(1962・63)、昭和60年(1985)、平成7年(1995)、平成9年(1997)と数次にわたり調査が実施されている。縄文から中世に至る遺構・遺物が発見されているが、中心となるのは古墳時代から古代にかけてである。

今回現地に赴いた時間には既に潮が満ちていたため に、海岸部の踏査はできず、写真撮影のみ行った。

#### (参考文献)

酒詰仲男 1964「長崎県大浜遺跡の発掘調査概要」『五 島遺跡調査報告』長崎県教育委員会

福田一志 1998 『大浜遺跡』 長崎県教育委員会

# ④勘次ヶ城跡沖(かんじがしろあとおき)

五島市中心部から南西約10kmの旧富江町南部ムシマ 鼻に、延長80mに及ぶ石積み遺構がある。この遺構は 「勘次ヶ城跡」、別名「山崎の石塁」と呼ばれ、中世に

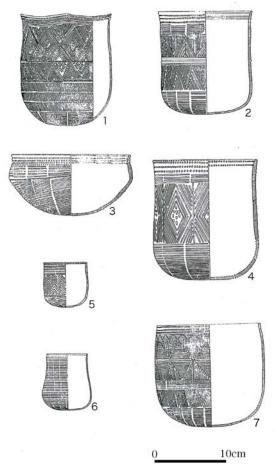


Figure 5 曽畑式土器

造営されたと推測されている。倭寇の砦跡との説もあるが、その性格は明確ではない。この勘次ヶ城跡の沖合 300 m先に八幡瀬(ばはんぜ)と呼ばれる暗礁があり、そこで座礁した船の積荷を地元民が略奪していたとの言い伝えがある。この伝承が事実とするならば近隣に沈船が遺存している可能性がある。写真撮影を行った。

#### (参考文献)

http://www.nagasaki-np.co.jp/kankou/tanhou/goto/history/47.html

#### ⑤唐人瀬 (唐船の底突瀬)

現地には赴かなかったが、富江港寄りに唐人瀬とよばれる岩礁がある。唐船の底突瀬ともいう。「富江町郷土誌」によれば、江戸時代に唐船がこの岩礁に碇泊していたところ、小島の亀蔵という者が包丁を口にくわえ、海中に沈んでその船の錨綱を切断したので船が座礁し、積荷の焼物が漂着したという。

#### (参考文献)

富江町郷土誌編纂委員会 2004『富江町郷土誌』

#### おわりに

今回、調査対象とした遺跡は、水中遺跡と言っても その多くは海岸の潮間帯に立地するものであり、常時、 水面下にあるわけではない。今後、水中遺跡の定義も 含めて議論していかなければならないが、データベー ス作成にあたってはできるだけ多く資料を収集したい と考えている。 2日間(実質1日半)という短い調査期間であったが、地元の永治克行氏や田中栄次氏の御協力を得て、多くの遺跡を実見し、写真撮影することができた。特に永冶氏にはお忙しい中をご同行いただき、深く感謝申し上げる。





Figure 7 干潮時の堂崎遺跡



Figure 8 大浜遺跡



Figure 9 勘次ヶ城跡



Figure 10 案内くださった永冶克行氏(右から二人目)



Figure 11 勘次ヶ城跡沖(八幡瀬)